

ドイツ リーツェンの桜



肥沼信次さん

めいじ ねん とうきょうはちおうじ う こえぬまのぶつぐ ほうしゃせん
 明治41年、東京八王子で生まれた肥沼信次さんは、放射線
 いがく けんきゅう こくひりゅうがくせい わた かんせんしょう けんきゅう
 医学の研究の為、国費留学生としてドイツに渡り、感染症を研究
 あと さい だいがく きょうじゅ すいせん
 した後、35歳でベルリン大学の教授に推薦されました。



とうじ ひき どくさいせいけん
 当時のドイツは、ヒトラー率いるナチス独裁政権がポーランドに
 しんこう じき にほん ほんこ も かれ ちゅうせい ちか
 侵攻した時期です。日本に誇りを持つ彼は、ナチスへの忠誠を誓う
 しょうい にほんこくせき どうどう せんせい こうえん にほん
 書類なのに、日本国籍であることを堂々と宣誓し、講演でも、日本の
 がくしゃ ゆうしゅう けんきゅうせいか と あ
 学者の優秀な研究成果を取り上げます。

※写真はすべて「紫芳会だより〜輝く先輩達〜」から転載しています

せんきょう あっか にほん かえ かれ でん
 戦況が悪化しても日本に帰らなかった彼は、伝
 せんびょう だいいりゅうこう まち
 染病のチフスが流行するリーツェンという街



肥沼さんが働いていた伝染病医療センター
 現在はリーツェン市役所庁舎となっている

けんしんてき ちりょう まち はかい じゅう
 で、献身的な治療にあたります。街が破壊され、十
 ぶん せつび なか ぶえいせい かんきょう ゆうかん ちりょう と く
 分な設備もない中、不衛生な環境で、勇敢に治療に取り組みました。

くすり あつ なんみんしゅうようじょ で む なか じしん かんせん
 薬をかき集め、難民収容所にも出向く中、自身もチフスに感染、
 にほん さくら いちどみ ひと み
 「日本の桜をもう一度見たかった。ドイツの人にも見せてあげたかっ
 た。」と言い残し、自らには薬を使わず、37歳で亡くなります。

かれ し ねんご ひとびと すく いし しら
 彼の死から43年後、リーツェンの人々を救った医師について調べ
 きょうどはくぶつかん かんちょう はかせ つう とうじ
 ていた郷土博物館の館長が、ピアマン博士を通じて、当時ドイツにい
 むらたもつきょうじゅ たの にほん しんぶん たす びとらん かれ な の
 た村田全教授に頼み、日本の新聞の尋ね人欄に彼の名を載せると、
 おとうと えいじ れんらく き ひとびと こうりゅう
 弟の栄治さんから連絡があり、これを機にリーツェンの人々と交流
 はじ へいせい ねん こえぬまのぶつぐ きねんしきてん おこな
 が始まり、平成6年には肥沼信次さんの記念式典が行われました。

そして、死の間際に「もう一度見たかった」と言った日本の桜
 ねん へ えいじ おく ね お
 が、48年を経て栄治さんから贈られ、リーツェンに根を下ろし、
 こえぬまどお なづ なみきみち さくら う
 「肥沼通り」と名付けられた並木道にもその桜が植えられました。

はなし いま きょうかしよ の ひとびと ところ きざ
 この話は今もドイツの教科書に載っており、人々の心に刻まれ、
 ひがしにほんだいしんさい おり おお ぎえんぎん とど ぜんい
 東日本大震災の折にはリーツェンから多くの義援金が届くなど、善意
 わ ひろ にほんじん いし も
 の輪として広がっています。これは、ひとりの日本人医師が持っていた
 ひと おも ところ じんどうてきしめいかん にほんじん ほこ
 た「人を思いやる心」「人道的使命感」「日本人としての誇り」、そして
 いのち とうと わたし おし
 て「命の尊さ」についても、私たちに教えてくれて
 いるのではないのでしょうか。



肥沼さんのお墓



宇陀市人権啓発活動推進本部



リーツェン市の肥沼信次記念館